『牧野富太郎』を読んで

たとえ山の斜面を転がり落ちても、おばあさんがきりもりしていた
岸屋（造り酒屋）をやめてでも植物分類学をやめない牧野さんの熱意に、
私は本当に好きだからこそあきらめないんだなと思いました。

（あいみ）

『牧野富太郎』を読んで

小さいときから植物好きでかしこいことがびっくりしました。

最後の言葉が心にしみました。

（ももか sa）

『牧野富太郎』を読んで

私はこの牧野富太郎さんの人生を読んで、どんなことがあっても
ポジティブに考えることは、大切だなと思いました。
なぜかというと、ネガティブに考えてしまうと、あきらめが早くなってしまって
何も達成できなくなってしまうからです。牧野富太郎さんは、どんなことがあっても、
ポジティブに考えてあきらめませんでした。
私も牧野富太郎さんみたいにポジティブに考えて
あきらめないようにしたいです。

（はるか）

『牧野富太郎』を読んで

私も植物が好きだけど、富太郎は学校をやめてしまうほど
好きな事に熱心なのでびっくりした。九十さい以上の人生で、
植物だらけなので、よほど植物が好きなんだと思った。
勉強熱心ですごいと考えたけど、
自分はついていくことができないと感じた。　（ふみか）

『ももちゃんのピアノ』を読んで

私はこの本の説明がある前に題名を見た時は、まさか戦争の話だとは
思いませんでした。なので、聞いた時は、とてもびっくりしました。
この本で一番印象に残ったのは、岩穴で兵隊さんが「これからは、
生きることを考えなさい」と言った時です。なぜかというと、私も生きてほしいと
思ったからです。兵隊さんたちがいなかったら、ももちゃん達は全員
死んでいたんだと考えたら、少しこわいです。ももちゃん達を生かしてくれた
兵隊さんたちにも、私は生きてほしかったです。ももちゃんは小さいころから
戦争を体験していて、とってもこわかっただろうなと思います。
この本を読んで戦争をくり返さないために知ったことを
みんなに話して伝えたいです。　（はるか）

『ももちゃんのピアノ』を読んで

沖縄県のひめゆりのとうへ行ったことを思い出しました。

あの時もひめゆりのおばあさんが優しく

戦争はだめだと話していたことが心に残っています。

（あやの）

『ももちゃんのピアノ』を読んで

私は、ピアノを習っていて、この本の題名にもピアノという言葉が
ついているので、手に取って読んでみました。
昔のころのももちゃんは、つらい思いをたくさんしてきたことが、よく分かりました。
戦争はつらい思いや悲しい思いをしないといけないので、
絶対にやってはいけないと思いました。　（あやか）

『ももちゃんのピアノ』を読んで

私の家にもピアノがあってよくひくので、ももちゃんは音の出ない紙のピアノで小さい時は練習していたけれど、ピアノをひくことが好きなところは同じだなと思いました。

東風平先生が「ももこ、ぜったいに死ぬんじゃないぞ。生きるんだよ。」と言った時は、感動しました。

戦争をすると、いろんな人がなくなるから、だめだなと思いました。

（ももか　tu）

『宇宙食になったサバ缶』を読んで

高校生が、夢が詰まったサバ缶を作り上げた！

こんなすごいことが福井で起きていたなんて知らなかった。

最初は小浜水産高校生のたった一言から始まったけれど、

たくさんの後輩、会社の人達が繋いでいったことで、

大きな結果が最後に残ったのだと思った。

どんな困難にあっても立ち向かっていく先生、生徒に熱い思いを感じた。

（ともか）

『宇宙食になったサバ缶』を読んで

これは、福井県の高校生達が開発した宇宙食のサバ缶が、

宇宙で食べられるまでのお話です。

たくさんの人の協力、そして何よりも生徒達の探求心、

チームワークがあったからこそ、

このサバ缶は宇宙に飛べたんだな、と思いました。

（しおり）

『宇宙食になったサバ缶』を読んで

この本には「サバ缶」が宇宙食になるまでのお話が書かれています。

宇宙食になるまで、いろんな人の努力がありました。

この本を読めば、宇宙食のことを知ることができます。

ぼくも将来宇宙食を作って、社会にこうけんしたいと思いました。

あと、宇宙でサバ缶を食べてみたいと思いました。

（こうへい）

『宇宙食になったサバ缶』を読んで

わたしがこの本を読んで一番びっくりしたことは、
福井県の高校生たちが作っていることです。社会の授業で
福井県のじまんできること、福井県の伝統のことを習っているけれど、
小浜や若狭のことは知らなかったので、この本を読んで知ることができて
よかったです。小浜や若狭の高校生たちは、よっぱらいサバを
宇宙で食べてほしいから、このサバを選んだのだと思います。
このサバ缶はもう発売されているので、食べてみたいです。

（みのり）

『宇宙食になったサバ缶』を読んで

ぼくはこの本を読んで、高校生の方たちが、

ピンチになってもあきらめず、サバ缶を宇宙へ飛ばそうとした

しせいに、胸があつくなりました。

読み終わったあと、心がすっきりしました。

（かずき）

『宇宙食になったサバ缶』を読んで

私がこの本を読もうと思ったのは、どんなお話か気になったからです。

この本で私がいちばん好きなのは、

「サバ缶、ほんまに宇宙にとんだんやなぁ」というところです。

理由は、読んでいる自分もうれしくなるからです。　（おとは）

『宇宙食になったサバ缶』を読んで

わたしは、この本を読んで、宇宙食を作るのは大変なんだなと
思いました。宇宙食を作るには、時間と苦労がいるんだなと思いました。
宇宙食を作るようになって、１０年以上の時間がかかっているし、
たくさんの材料を使って作っているところから、大変さを感じました。
いろんな困難がある中で、あきらめずに宇宙で食べられる
サバ缶を作った高校生がすごいと思いました。

（ゆずは）

『立てないキリンの赤ちゃんをすくえ』を読んで

このお話は、足の「腱（けん）」というところにしょうがいをもって生まれた
キリンの赤ちゃんの成長をかいたノンフィクションです。この本を読んで、
キリンが立てないということは、すごく深こくな事だと分かりました。
お母さんのミルクが飲めず、運動ができないと、死んでしまうこともあるそうです。
とても思いケガでも、大事な命を助けるために何度失敗しても、あきらめずに
たくさんの方法を見つけるところが、飼育員さんたちのキリンへの
愛が伝わってきました。ちりょう中もキリンの事を一番に考えていました。
また、この本にはいろいろな人々が登場して赤ちゃんを支えていきます。
そんな人々の会話や方言も面白いです。ぜひ読んでください。

（こころ）

『立てないキリンの赤ちゃんをすくえ』を読んで

はぐみは立てなかったけれど、みんなが協力し、そう具などを
使って赤ちゃんをすくったことがすごいなと思いました。
ますいを何回もしていて、赤ちゃんなのにだいじょうぶかと思っていたけれど、
最後走り回っていて良かったし、
助かったのでほっとした感じがしました。（ももか tu）

『立てないキリンの赤ちゃんをすくえ』を読んで

この本を読んで、たった一頭のキリンのために、１７人ほどの人が関わったと聞いておどろきました。また、足が異常だと感じた時に、飼育員さんが絶望的だったのは「わたしといっしょ」だと思いました。そのキリンが治って、やんちゃするようになったのはうれしかったです。

（ふみか）

『立てないキリンの赤ちゃんをすくえ』を読んで

麻すいをさすのもつらいのに、そう具がないといけない状態になっても

あきらめないで、みんなが一丸となっている事がすごかったです。

（すみれ）

『自由を求めて冒険へ!』を読んで

私がこの本を読んで一番かなしかったところは、ラテが
死んでしまったところです。GO はラテが死んだとき、
もう旅をやめてしまおうかとネガティブなことを考えてしまっていたけど、
少しずつ立ち直っていったので安心しました。
また、どの冒険でも最後には、いっしょに旅をした仲間の動物たちが
幸せに生きられるようにしてあげるところは、とても感動しました。
私は、冒険をしてみたことがないので、どんなに小さい冒険でもいいので、
一回だけでも冒険してみたいなと思いました。　（はるか）

『黄金の村のゆず物語』を読んで

ゆずを作るまで、とても長い時間がかかると知っておどろきました。

走川さんの考えが推薦されない時期もあったけれど、

無事にゆずが作れて良かったと思います。

また、走川さんの「ももくり3年かき8年、ゆずの大ばか18年」と

言っているのにも、話から「確かに」となっとくしました。

（ふみか）

『コレラを防いだ男　関寛斎』を読んで

けん命に手術をして、問診ををするときはやさしく話しかけ、
人の命を救うため努力している関寛斎の様子から、
努力し続ける心の強さを学べました。

（あいみ）